



メーリケの『宝物』におけるメルヒェン的なものと現実的なもの

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2009-08-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 岩元, 修<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.24729/00006149">https://doi.org/10.24729/00006149</a>                 |

# メーリケの『宝物』におけるメルヒェン的なものと現実的なもの

岩 元 修

メーリケの『宝物』*Der Schatz*は1836年に文芸雑誌『シュヴァーベンの詩人と作家の年鑑』*Jahrbuch schwäbischer Dichter und Novellisten*<sup>1)</sup>に掲載された。その時以来この散文作品の評判はあまり芳しいとは言えない。メルヒェンの世界に特有の超現実的な事件と、リアリズム文学に求められる現実的なそれが、境界をなくして絡み合っているために、読者はこの作品を空想的なメルヒェンと見なすべきか、それともリアリズム的な意味での現実を描いたノヴェレに分類すべきかにとまどい、作者の意図がなかなか理解できないというのである。<sup>2)</sup>なかにはこの作品は様式破綻がはなはだしく、読者を混乱させるためにあるというような極端な意見もあった。<sup>3)</sup>しかしメーリケが一般に文芸雑誌に発表した散文作品に向かって、「内容的にも形式的にも自己内部で有機的にバランスがとれた」<sup>4)</sup>芸術作品の、完全に閉じられた小宇宙的世界を要求してはいけない。彼の他の散文作品にも見られることだが、メーリケが19世紀前半のドイツ市民社会の文学状況のなかで、雑誌の読者をいかに意識して、その読者との対話性を作品のなかで追求していたかに思いを馳せれば、おのずからこの作品の読み方も変わってくることであろう。筆者は拙論「ビーダーマイアー期のメルヒェン —メーリケの『シュトゥットガルトの皺くちゃ親爺』について」<sup>5)</sup>のなかで、『皺くちゃ親爺』の解釈を容易にするために、同作品とペアーをなすものと作者自らが呼んでいた物語『宝物』の名を挙げ、『宝物』のテーマは、まさに物語ること、お話を作ることの楽しみであり、教養あるメンバーと有意義なひとときを過ごすという連帯感にある。語り手も聴衆も（作者も読者も）、新しい時代のメルヒェンに深遠な意味や不可思議な運命の表現を期待する気などさらさらなく、むしろメルヒェン（お話）を仲立ちとした人と人とのつながり、いわば麗しき共同体の存立に重点を置いているのである」<sup>6)</sup>と述べた。現在でもこの意見は変わらない。本論はこの先取りした結論を、本格的に証明しようとするものである。しかしそのためにも、まずはさまざまに言われてきた幻想性と現実性との複雑な絡み合いについて、筆者の見解を提示しておかなければならないであろう。それが同時に、筆者の考える方向での作品解釈をも導き寄せてくれるものと思われるからである。以上の趣旨で論理を展開するための基本的な作業として、作品の複雑なストーリーを確実に把握しておくことから始めよう。

## I

この作品は語られる諸事件の属する時間（時代）に応じて、三つの層に分割できる。一番新しい層は、全能の語り手が所属している現在（ビーダーマイアー時代）の時間である。この層を現在層と呼んでおこう。逆に最も古い層は、イルメル伝説と呼ばれる物語が展開する時間で、現在層から四百年以上も遡った中世に属する。この層を深層と呼ぶことにする。そしてこれら二つの層の間にあるが、時間的にははるかに現在層に近く、そこからせいぜい三十から四十年しか隔たっていない時間帯を主筋層と呼ぶことにする。なぜならこの層で作品の主要な筋が展開しているからである。三つの層はもちろん時代順に秩序だって現れるのではなく、互いに幾度も相前後して顔を見せ合うことはいうまで

もない。作品の面白さと複雑さを伝えられるような作品梗概を提供するには、時間層の交差し合ったままに作品の流れをたどってゆくことが最も好ましい方法であろう。しかしそれではあまりにも煩雑に過ぎ、紙面も大きく不足することになりそうである。そこで本論ではまずは各層ごとに事件を要約しておくことにする。

現在層の語りを担当しているのは全能の語り手である。彼はきわめて現実的な場面設定から始める。「K温泉の一流ホテルで、ある夜、紳士淑女の小さな一団が大きなホール（食事室）に集まって話に花を咲かせていた。」<sup>7)</sup> 具体的にどのような人々が集まっていたのかは、作品の終わりで明らかになるのであるが、いまは先取りして紹介しておこう。まずは宮廷顧問官（王室会計局長）フランツ・アルボガストとその妻ヨーゼフェ（彼女は早くに自室に戻っていて、この集いには参加していないことになっていたが、作品の終わりになって実は暖炉の陰に隠れて皆の話を聞いていたことが判明する）、そして少佐夫人、大佐、山林長官、若い女性コルネーリエ、一人のスイス人である。もっと他にもメンバーはいるかもしれないが、実際の発言からその存在を確認できるのはこれらの人々だけである。そして彼らのおおよその社会的地位から窺えることは、一団はかなり上流の中産階級の人々からなり、このサークルは、ビーダーマイアー時代の中産階級の一種のサロンの雰囲気醸し出しているということである。このことは作品全体を理解するための重要な要素となろう。

このような人々が集い、楽しみを求めて、アルボガストにお話をせがむ。「彼は謎めいた状況のお陰で、一介の金細工師の身からアーハフルトの当時王室会計局長と呼ばれていた地位へと、大変なスピードで出世した人であり、そのことについてはしばらくの間、上流の人々の間で奇妙な伝説が流れていた。人々は、まずは宮廷に関係した、全くの根拠なしとはいえない怪談と、この出世を結びつけざるを得なかった」<sup>8)</sup>と語り手はアルボガストを紹介する。ホールに集まった人々はそのいわくありげな話を是非とも聞かせてくれと頼む。アルボガストはそれに答えて、自分の生い立ちや妻ヨーゼフェとの結婚に至るまでのプロセス（と称されたお話）を物語り、出世の理由らしきものを示そうとする。それゆえ彼の話は一応は自伝であることになっている。そしてこの自伝が主筋層を形成しているのである。しかしこの主筋層の事件を理解しやすくするためには、それに先んじて深層のイルメル伝説を再現しておかなければならない。

アルボガストは自伝の中の挿入譚としてイルメルの伝説を物語る。約四百年前、レーヴェギルトという伯爵が、イルメル・フォン・デア・メーネを娶る。彼女は美しく富裕な女性であるが、伯爵のことは愛そうとせず、むしろ馬鹿にしている。一方伯爵は、この美しい女性と豊かな結婚生活を送ろうと、祖父の代から幸福な結婚のシンボルとされてきた金の鎖（ネックレス）を贈る。二人の間には最初の年に息子ができるが、イルメルの関心はもっぱら金儲けにある。彼女は高利で金を貸し厳しい取り立てをする。妻のこの下品な行いを、伯爵は恥ずかしく思うが、表沙汰にはせず、こっそりと陰で人々の借金を棒引きにしてやる。「復活祭」の日に、伯爵がこの棒引きの件をイルメルに報告すると、彼女は蒼白になり、その日以来、喜怒哀楽を伯爵には見せなくなる。そして彼女は、一歳に満たない子供を伯爵の子であるがゆえに愛することができず虐待する。伯爵は子供を姉のもとへ避難させるが、その後も夫婦は何事もない振りをして暮らす。しかし伯爵が皇帝への奉仕で城を明けたとき、イルメルは城に立ち寄った若い旅人と姦通する。この愛人といっしょになって妻が、夫である自分を愚弄するような会話をしている現場へ、ちょうど帰り着いた伯爵は、イルメルから婚姻の鎖を取り上げ真ん

中から二つに引きちぎって、「今からずっと我々二人の間もこうなってしまう。ここにある鎖は、おまえには百ポンドの重さになるであろう。そして墓の向こうに行ってもおまえはため息をつきながらこのおもりを引きずらねばならないのだ、この両端が寄って再び一つに繋がるまでは」<sup>9)</sup>と言いつつ、引き裂かれた鎖を城の足下を流れる川に投げ込む。これがイルメルにかけられた呪いの内容であり、彼女の亡霊は、青年アルボガストが生きている時代になっても成仏できず、鎖を引きずって近辺をさまよっているというのである。同時にこの伝説には、イルメルが城の外に隠した財宝が埋まったままになっているということと、いつか「復活祭の（日に生まれた）子供」(Osterkind)がイルメルの呪いを解くであろうという希望も、合わせて言い伝えられている。以上が深層の事件である。

さてここから主筋層を要約してみよう。アルボガストは金細工師の息子として生まれるが、幼くして父をなくし、また母をも思春期になくす。彼は親方をしている従兄のもとに弟子入りし、そこで引き立てられて、金細工師として一人前になってゆく。この「金細工職人になるべく定められた」少年は、(早逝した母から)堅信礼のお祝いに不思議な贈り物をもっている。それは「堅信礼の日に忠実にフランツ・アルボガストに渡さるべし」<sup>10)</sup>として、彼がまだ幼かったある日、厨の竈の上に置かれてあったもので、「宝の小篋」(Schatzkästlein)<sup>11)</sup>と銘打たれたその小冊子には、「復活祭の子供として生まれた若者の利益のために、一般的な教えの百ヶ条、ならびに商売活動の特殊事項に関する付則一ヶ条を収む」<sup>12)</sup>として、あらゆる種類の諺や格言が書きこまれていた。これを書いたのは後に言及されるのだが、イルメル夫人の住んでいた城を代々所有し続けていたレーヴェギルト一族の末裔で、(もちろん主筋層に属する人物であるが)ゾフィー・フォン・ロッヘン男爵夫人であることになっている。この小冊子は事件が進行するための重要なモチーフである。

さてアルボガストは従兄の信頼篤く、国王の結婚に際して、花嫁の戴冠用装飾品、とくに冠の製作を委ねられ、不足している宝石を購入するためフランクフルトへ行かされるが、その途上、彼は購入資金の四百ドゥカーテンの金貨を盗まれる。しかし宝の小篋に書いてあった文を思い出しほっとする。「汝がゴルゴンの日(9月9日)に盗まれしものは、チュープリアンの日(9月26日)までに再び取り戻せよう。それを求めて騒ぐことなかれ。むろん慎重ではあれ」<sup>13)</sup>と宝の小篋は謳っている。まさに盗難に遭った日はゴルゴンの日であり、冊子はそれを予言していたのだから、金貨を取り戻せるということをもやはり正しく予言しているはずだと彼は考えて、悠然と途中の町で時間を送る。

しかし二週間ほどしてアルボガストは、宝の小篋の教えを信じたばかりに盗難を届け出なかったことを悔やみ、その町を離れ母方の親戚が住んでいるはずの町グリュクスホーフ<sup>14)</sup>を目指して出発する。しかし彼は荒野で道に迷い、「灰色の城」と呼ばれる無気味な館に滞在することになってしまう。しかしこれは運命に定められた成り行きであったのかもしれない。この城はあのイルメルの城であり、また城番の姪だとされるヨーゼフェは、実は、この時までは猩紅熱で死んだものと聞かされていた、彼の幼なじみの初恋の女性であったのだ。そしてアルボガストが製作する冠を戴くことになっているアウローラ姫はイルメルの子孫であることも判明する。この時点でイルメルの破綻した結婚(の伝説)、アルボガストとヨーゼフェの結婚、国王とアウローラ姫の結婚という婚姻をめぐる三つの話題が結びついてくる。

さてヨーゼフェは少女期に堅信礼を前にして、死んでしまったものと思われていたが、ゾフィー・フォン・ロッヘンに不思議な方法で助けられて灰色の城で育つことになった。ゾフィーは、一族の祖

先であるイルメルを伯爵の呪いから解放するために、復活祭の子供（であり且つ金細工師になるべき男児）を探していたが、ついに該当者アルボガストを発見し、こっそりと宝の小管を贈ったりしながら、彼のことを陰から見守っていたのだ。そしてヨーゼフェのことは、将来アルボガストと二人してイルメルを解放するための困難な役割を無事果たせるようにと、職人の妻に相応しい教育を施したというのである。

ゾフィーの義弟であるマルツェル・フォン・ロッヘン男爵は、難事業を遂行できるまでに成長した二人を前にして、イルメルの鎖を修復するための準備をするようにと言う。そしてアルボガストはヨーゼフェに、城の地下室にある（鎖を繋ぐための）仕事場へと案内される。この金細工の工房もゾフィーが準備していたのだという。さてここから先の、イルメルの解放を企図した具体的行動についてはアルボガストは少しも話そうとはしない。主筋層の話はこうしてひとまずは途切れてしまう。それゆえ（目下の段階では）この層についてはもはや述べる必要はないのかもしれないが、今ひとつアルボガストが城で見た夢（らしきもの）については触れておかなければならないであろう。

灰色の城に滞在していたアルボガストは、ある夜、喉の渇きに目を覚まし、夢うつつの状態で灯りをとともして階下へおりてゆき、物置部屋で小人の測量技師と出会う。小人のヴァイデフェーガー族に関する話を聞かせてもらったという。この小人族は強盗と略奪をくりかえし、黄金を宝庫へ隠しているらしいが、その宝庫はイルメル夫人が宝物を隠していた場所であり、彼らはつぎつぎと盗んだ財を隠匿しては増やしているというのだ。イルメルの断ち切られた鎖もその中にあるらしい。アルボガストは自分の盗まれた四百ドゥカーテンもそこに隠されていると考える。さらに測量技師から聞かされたところによると、民間伝説では、復活祭の子供として生まれた若者がいつの日かこの宝物を明るみに出して、イルメルの鎖も再びつなぎ合わせ、彼女の霊を解放することになっているということである。技師と言葉を交わしていると、目の前でヴァイデフェーガー族の収穫祭が展開する。しかしアルボガストがその祭りの場面に登場したワイン樽をつかもうとして、小人たちの祭りにパニックを引き起こし、映像は消えてしまう。その後どのようにして自分は部屋に帰ったのかわからない、多分すべては夢であったろうが、この夢は吉兆だと思ったと、アルボガストは言うのである。

そして別の日に城の葡萄園を見たとき、その眺めが夢の中で小人族が収穫祭を祝っていた土地の風景と全く同じであることに気づき、アルボガストは幸先がよいと考える。なぜなら、まさにこの地にイルメルの宝庫があり、小人たちの盗んできた宝物でそれは大きく膨らみ、自分の盗まれた四百ドゥカーテンもきっとそこに隠されているであろうと推測できたからである。

さてアルボガストは自伝についてはこれ以上の話はしたくないと言うので、主筋層はこれで途絶えてしまいそうである。とにかく作品の時間は現在層へ戻って、温泉地の夜の集いの場面を、再び全体の語り手が再現することになってしまったからである。「今や私のお話の最後の章に来たようです。そしてそれが独特の魅力を持っていることは、なるほど保証はできるのですが、私の敬愛するみなさまの忍耐力をお試しするに、限度を超えてしまいましたので、本日はここまでにしておきたいと存じます」<sup>15)</sup> と言って、話の結論を聞かせてくれないアルボガストに対し、みんなは抗議する。アルボガストは言う、「私のお話のこの部分は、本質的にはとにかく自然と明らかになってくるはずのものですから、私はいつもそれを語りたくないということにしているのです」と。<sup>16)</sup> 一同はその理由を聞いたがるが、アルボガストは単なる気まぐれにしかすぎないと言う。このような問答が少し続いたあと、若

い女性のコルネーリエが、最後までお話を聞きたがる人々のために、アルボガストの自伝であったはずの物語を引き継ぐ。それによると、アルボガストの夢の話聞いたロッヘン男爵は発掘を指揮し宝物を光のなかへもたらす。アルボガストは四百ドゥカーテンを取り戻すが、その時一緒に見つかったイルメルの呪いの鎖を、彼は地下の仕事場で繋いで修復し、ヨーゼフェと二人して亡霊の出没する川へ沈めて、イルメルに安らぎを与えることになる。そしてアルボガストが早い出世をしたのは、やはりその時に発掘されたヴァイデフェーガー族の女王の冠のすばらしい意匠を、アウローラ姫の冠に彼が採用したからだという見事な結びを考案して、コルネーリエは話を結ぶのである。アルボガストは「実際あなたは二、三の些細な点を除けば、私の秘密をごく礼儀正しく推測なさいましたので、私は全くお世辞抜きに驚嘆の念を表せずにはられません。そしてこれで私のお話は完結したものと宣言するのに躊躇いたしません」<sup>17)</sup> と言って、コルネーリエの話の閉じ方を承認する。

さて主筋層の話がこのような形式で完結して、話題は完全に現在層へ移行し、いよいよ『宝物』は終わりに近づく。アルボガストは部屋に帰ったが、先に眠っていたはずの妻がいない。彼が再びホールに戻って来てそのことを言うと、暖炉の陰からヨーゼフェが「そを求めて騒ぐことなかれ。むろん慎重ではあれ」(アルボガストが金貨をなくしたときに思い出した宝の小笥の言葉) と言いながら登場する。彼女は、「夫が自分のためにこね上げてくれた美しいこと、喜ばしいことのすべて」<sup>18)</sup> に優しく感謝の気持ちを表し、しかし全体としては彼が決して作り話を述べたのではないという裏書きを与えさえもする。人々が散会したときは、「もう鶏が鳴いて」<sup>19)</sup> いた。

## II

さて時間の層ごとに話の内容を要約してきたが、ここからは、主筋層の現実性の度合い、すなわちアルボガストの青春を巡る諸事件の真実性について検討してゆきたい。まず彼が一介の金細工師から身を起し、王室会計局長へととんとん拍子で出世したということは、物語全体の語り手が客観的な事実として伝えているはずであるので、このことはたぶん真実として信じてよいであろう。そしてその出世の早さに関して怪談めいた話が流布しているという点も事実と認めてもよいであろう。しかしその怪談が真剣に語られているものであると信じる必要はない。むしろアルボガストの出世の理由が面白おかしく話されているだけだと考えるべきである。しかも作品の終わりでアルボガスト自身が、自分の話の結論については「いつもそれを語りたくないことにしている」と告白しているところから見て、この怪談めいた話は繰り返し語られているものであり、実のところ彼自身がそれを創作してこれまで多くの人々に物語り、自らが奇妙な噂(伝説)を流布させてきたと考えてもよいのである。たぶん温泉地に滞在する人々もそのことを暗黙のうちに了解し、その上で彼の話を知りたいと願っているのである。このような相互了解のもとで、メンバーは、あたかも真実の自伝が話されているかのようにアルボガストの話に耳を傾け、彼自身も「皆さんは信じ難い話を聞かされて、最後には、私がたんなる子供のメルヒェンで皆さんを丸め込もうとしているようだと、苦情をおっしゃるかもしれませんが、そんな危険を冒してでも皆さんに満足していただくつもりです」<sup>20)</sup> とわざわざ断って、やはり真実を語ろうとしている振りをするのである。「私たちは(信憑性に対して)何もそんなに神経質にはなっていませんよ。疑う気になれば、あとから批判は自由ですから」<sup>21)</sup> というメンバーの女性の言葉は、このあたりの事情をほとんど漏らしている。こうして作品の冒頭からすでに明らかであると思

われるのは、人々は決して話の信憑性を問題にはしていないということ、それよりも、みんなでお話を楽しむことに重点を置いているということである。架空のメルヒェンとってよいものを、あたかもアルボガストの自伝の如くに傾聴し、彼の出世についての荒唐無稽な面白い話を聞き出して、さらには一種の創作の楽しみをも皆で共有しようとしているのである。

このような前提で主筋層を観察すれば、宝の小筥についても、それが実在のものとして描かれているのか否かという判断を下そうとするのは、全くのナンセンスであることが明白になる。なるほどこの小冊子については、「黒のゴールドバ革の表紙、緑の小口、雪のように白い羊皮紙の頁」<sup>22)</sup>で出来ているというような精密な描写が施されてはいるが、それものちにゾフィーが「一家の色」としていたとされる「緑、黒、白」<sup>23)</sup>と対応させるための伏線であり、要は、アルボガストの人生がゾフィーの思惑通りに展開していることを証明するためのモチーフとして宝の小筥は登場させられているのである。一人の人間の人生を（『ヴィルヘルム・マイスター』における塔の結社のごとく）管理運営することなど出来るはずもなく、この物語におけるような実効性のある宝の小筥が実在することなど毛頭ありえないということは、ホールのメンバーも初めからわかっているのである。

しかしアルボガストはほとんど全てを事実裏付けされているかのように物語る。その神経の配り様は心憎いほどである。メルヒェン的な要素が強くなりすぎたときにはそれを中和するような言い訳を付け加える。例えば荒野で望んでいたのとは逆の方向へ足が向き、あたかも幽霊に導かれるかのように灰色の城に到着してしまった時のことを、「いささかブランデーに酔っていたのかも知れません。というのも、その瓶がほとんど空になっているのがわかったからです」<sup>24)</sup>と言って、神秘的な感じ方を揶揄することもあるのである。

一方ヴァイデフェーガー族の夢を見た時のことについては、「目が覚めていたものか、眠っていたものか、みなさん、私としてもはっきり申し上げる勇氣はありません。これは私の物語のなかで、どんなに骨を折ってみても今まで決着の付かない一点なのです」<sup>25)</sup>と言って、むしろ夢にすぎないという限定を回避して、メルヒェン的な事件の実在を否定してしまわないようにもしている。

しかし死にかけたヨーゼフェのベッドの脇に立っていたという妖精ブリスカルラティーナ (Fee ブリスカルラティーナ Briscarlantina) については、以前ある若い医者が、それは猩紅熱 (Febris ブリスカルラティーナ scarlatina) という語を変なところで切っただけの言葉に過ぎないと自慢げに説明した、という注を付け加えて、ユーモアでもってこの妖精の存在を否定するのである。<sup>26)</sup>やはりメルヒェンの世界に入り込むことを避けているのであろう。

このようなアルボガストの一種の現実性志向に対して、メンバーは協力的である。アルボガストは、ゾフィー・フォン・ロッヘンのことをヨーゼフェから聞いた時にはもう夫人は他界しており、それゆえ夫人をめぐる彼の話には、(ヨーゼフェが先に部屋に帰っていることになっているため) 実際のゾフィーを知る証人が必要であると言う。そしてその証人に少佐夫人を指名する。彼女は四十年(以上)前に、男爵夫人に出会ったと答える。このことを聞いてメンバーの一人である無邪気なスイス人が愉快な反応を見せる。彼は今までの話は全て作り話だと思っていたのだが、少佐夫人がゾフィーを知っていると聞き、それだったら「名誉にかけて居眠りするんでなかったに(スイス方言)」<sup>27)</sup>と発言してメンバーを笑わせるのである。彼だけはこの集まりのゲーム性がわかっていなかったということであろう。これは不注意な読者にも当てはまることかも知れない。この夕べはメンバーが楽しいお話を聞

いて、不足があれば補い合うひとときとして描かれているということがわからなければ、この作品の面白さは味わえないであろう。スイス人以外のメンバーは自分たちが一種のゲームに参加していることをよく心得ている。そしてこのゲームには一つのルールがある。お話のすべては現実のものではなくアルボガストの創作であり、彼から要求を受ければ、現在層のメンバーたちは、それに相応しい話題を提供しなければならないというルールである。相応しい話題とは、アルボガストのお話の性格を踏襲し、非現実的な事柄に現実性の衣を着せたものである。

少佐夫人は、ゾフィーが如何に貞淑な未亡人であり、聖女と慕われ、領地管理にも優れていたかを語って、彼女が実在したという信憑性を高めながら、それと同時にアルボガストが語ってきたフィクションとの整合性をもうまく作り出す。すなわち、未亡人は予言の才を与えられており、ある人が超感覚的なことに対するセンスと才能を備えているかどうかを、直感的に見抜く能力を持っていると言われていたということ、そして何人かの聖職者たちと文通をしていて、人々の間の考えられる限りの関係について、そして「その人々の出生の日付」<sup>28)</sup>について、精確な知識を手に入れようとしていたことなどを真実らしく語るのである。そしてゾフィー・フォン・ロッヘンの神秘的な「一家の色」は（宝の小篋に見られた）「緑、黒、白」であり、義弟マルツェルは姉に敬意を表して、儀式の際にはその色を身に帯びていたとまで言うのである。少佐夫人の、ルールに則った即興的な創作力も大したものである。

同様に山林長官もなかなか巧みである。ヴァイデフェーガー族が隠した宝物の発掘に関するコルネーリエの提供した結びを、彼はもう少し現実レベルへと近づける。実際に三十年ほど前にあの当該の城で発掘が行われたと、彼は義兄から聞いたことがあった、そしてその時に掘り出された宝物は、悪名高い強盗ファリガンとその後に現れた盗賊が埋蔵したものであり、アルボガストの四百ドゥカーテンもその盗賊が盗んでそこに隠したものと思われる、さも本当らしく言うのである。山林長官もルールを理解しているのである。

しかしアルボガストに負けぬほどの物語の才を持ち合わせているのは、コルネーリエであろう。彼女は、現実と非現実の絡み合いのなかに物語は進行するのであり、どこまでが現実でどこまでが非現実であるかなどと問う必要はないという。何よりも彼女には話の一貫性を確実に維持する能力が備わっている。アルボガストのヴァイデフェーガー族についての夢を基準にして発掘の場所が決まったこと、復活祭の装いをしたマルツェル・フォン・ロッヘンが陣頭指揮をして小人族の宝物を発見したこと、同時に見つけられたはずのイルメルを引き裂かれた金の鎖を、若い金細工師のカップルが本来の環に戻して川に沈め、亡霊の霊を救ったこと、そしてヴァイデフェーガー族の王妃の冠に倣ってアウローラ姫の冠が作られたことまで、コルネーリエはアルボガストの物語に含まれていた重要なモチーフを見事に結びつけるのである。まさに彼女はこのような集いの理想的メンバーであり、また理想的な読者像を示しているとも言えよう。「理想的な読者だけが、空想力と注意深さをもって、テキストからの示唆に基づき、物語を補完することができる」<sup>29)</sup>からである。コルネーリエは単純なスイス人とは正反対の存在である。<sup>30)</sup> 物語の結びはもう語りたくない、というアルボガストの言葉は、実は、続きは誰かに任せようという意味の提言であったのだが、この提言に彼女は見事に答えたのである。こうして、コルネーリエの物語づくりに対する姿勢を観察することにより、この作品をめぐる筆者の最終的な見解も同時に明らかに示すことができたものと思われる。現実か非現実か、ノヴェレかメルヒ



エンか、というような問いは全く不要なのである。パーティーの参加者がお話を楽しみ創り出すという、そのプロセスとルールを表現（再現）することこそが、メーリケが自らに課したテーマであったのだ。

現実性と非現実性をめぐる疑問を克服した今、もしも仮にこの作品に「精神的・世界観的」なテーマ、理念的で完結したいいわゆる文学的な主題を求めるとすれば、『シュトゥットガルトの皺くちや親爺』の場合と同様、結婚の問題であろう。破綻した結婚<sup>31)</sup>の象徴であるイルメルの鎖をめぐり、ゾフィー・フォン・ロッヘンが呪いの解放を意図してアルボガストとヨーゼフェにその任務を課し、その二人は四百年間続いた呪いを見事に止揚する。それによりイルメルの子孫であるアウローラ姫の結婚も真に祝福されたものとなるのである。職人（市民階級）のアルボガストがグリュックスホーフを目指しながら、清純な乙女ヨーゼフェのもとにたどり着き、彼女を再発見して幸福な結婚に到達したということも、ストーリーの目標が幸福な結婚であったことを裏付けているとも言えよう。題名の『宝物』とは、金銀財宝ではなく幸福な結婚のことであったのだ。そしてこのようなテーマを作品の主題として掲げるならば、この作品は、複雑な形式を持ちながらも、『皺くちや親爺』と同様の、象徴性の高い（幸福の）メルヒェンと呼んでもよいであろう。

しかし筆者は考え方を逆にしたいのである。この作品は、むしろメルヒェン的な象徴性を持った結婚のモチーフを縦糸にしなが、サロンのルールを知る人々が語り合いお話を形成してゆく複雑な構造を再現したものと考えの方が、実体に即していると思われるからである。<sup>32)</sup>（もちろんメルヒェンに対するノヴェレという呼称を持ち出す必要もない。）このサロン的な世界は温泉地に遊ぶ上流の市民階級の人々からなるものであった。彼らこそこの時代の文学の読者でもあり、同時に雑誌等のメディアを通して市民社会の教養と娯楽の基準を提供する役割も引き受けていたのである。時代の文化をリードする上流市民が営むべき文化的サークルの一つの姿を、メーリケは『宝物』の現在層で提示しているといえよう。一定の社交的ルールに従いながら、参加者が一体となって楽しみを形成してゆくこの共同作業は、市民社会に相応しい真のエンターテインメントであり、それが新しい時代を担う市民社会の内部での相互理解を促すという効果をも持つことを、メーリケは望んでいたであろう。

テキスト

Eduard Mörike : *Sämtliche Werke in zwei Bänden*. Textredaktion : Jost Perfahl. München 1967-70, Bd.1, S403-461.

#### 注

1) この年鑑に載った稿が初稿であり、第二稿は作品集『イリス』*Iris*、第三稿は同『四つの物語』*Vier Erzählungen*に収録された。初稿と第二稿における題名は『宝物、メルヒェン』であり、第三稿においては『宝物、ノヴェレ』であった。メルヒェンかノヴェレかという読者の批判的な問いを、メーリケ自身もかなり気にしていたことがわかる。この論文に用いたテキストは第三稿に従っている。

2) Vgl. Steinmetz, Horst : *Eduard Mörikes Erzählungen*. Stuttgart 1969, S.44.

(Maync, Harry : *Eduard Mörike. Sein Leben und Dichten.* Stuttgart 1902, S.209f.)

- 3) Vgl. Storz, Gerhard : *Eduard Mörike.* Stuttgart 1967, S.248.
- 4) Steinmetz : a.a.O., S.52.
- 5) 岩元修 「ビーターマイアー期のメルヒェン — メーリケの『シュトゥットガルトの皺くちや親爺』について —」大阪府立大学紀要（人文・社会科学）第49巻（2001）。(S.9-20)
- 6) Ebd. S15.
- 7) 8) Mörike : a.a.O., S403.
- 9) Ebd. S.423.
- 10) Ebd. S.404.
- 11) 「宝の小筥」とは、グリムのドイツ語辞典に従えば、「教化目的や饗応目的のために、価値のある思想や箴言を収めた本」（Bd.8, Sp.2288）ということになっている。
- 12) Mörike : a.a.O., S.404.
- 13) Ebd. S.408.
- 14) グリュックスホーフ（Glückshof）とは「幸福の館」という意味を持つ。
- 15) Mörike : a.a.O., S.457.
- 16) Ebd. S.458.
- 17) Ebd. S.460.
- 18) 19) Ebd. S.461.
- 20) 21) Ebd. S.403.
- 22) Ebd. S.404.
- 23) Ebd. S.454.
- 24) Ebd. S.416.
- 25) Ebd. S.431.
- 26) ルートヴィッヒ・フェルカーはアルボガストのこのユーモアと非メルヒェン化志向が理解できず、この若い医者をも医学的、科学的な理性主義に捕らわれて物語（文学）を楽しめない人物と見なしている。  
Vgl. Völker, Ludwig : *>Daß das Wunderbare nur scheinbar ist und bloßes Spiel<. Form und Geist des Erzählens in Mörikes >Der Schatz<.* In : *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft* 29 (1985), S.333f.
- 27) Mörike : a.a.O., 453.
- 28) Ebd. S.454.
- 29) Evers, Daniela : *>Eine kleine Diskussion über Dichtung und Wahrheit<. Mörikes >Schatz< — eine Erzählung über das Erzählen.* In : *>Der Sonnenblume gleich steht mein Gemüthe offen<. Neue Studien zum Werk Eduard Mörikes.* Hrsg. v. Reiner Wild. St.Ingbert 1997, S128.
- 30) フェルカーはこのスイス人に対しても、芸術に対する理解能力を完全に欠いた存在として、厳しい目を向けているが、食堂のメンバーは決して排他的にはなっていない。メーリケのこの作品を、エンターテインメントとしての文学（あるいはエンターテインメントを再現した文学）と見なす

ことを避けようとするれば、狭量にならざるを得ないのであろうか。

Vgl. Völker : a.a.O., S333.

- 31) 夫を愛せず我が子までも憎んでしまうイルメルと対をなすように、『皺くちや親爺』のなかでは、ウルムの親方未亡人が夫を愛せず、彼を（および二人目の夫をも）殺していた。人間の心の（実存的な）闇のような世界をメーリケは両作品で描いていることになる。
- 32) 初稿では、散会の前にヨーゼフェがハープを奏でながら（アルボガストの自伝のなかでは彼女は灰色の城でハープを習ったとされている）、ミレジント王のバラード（『悲しき戴冠』）を歌っている。（筋に統一がないと非難されたからであろう、メーリケは第二稿、第三稿ではこの部分を削っている。）初稿に登場したメンバーは、アルボガストの物語が終わった後で、（内容的には物語とは無関係とはいえ）バラードと音楽を楽しんだのである。このように初稿を検討することにより、メーリケが如何にして人々のエンターテインメントの場面を描こうとしていたかがわかるであろう。

Vgl. *Der Schatz. Märchen*. In : *Jahrbuch schwäbischer Dichter und Novellisten* (1836), S.221f.